

# インド密教における五護陀羅尼と女尊 Mahamayuri とMarici を中心に \*

著者	園田 紗弥佳
著者別名	SONODA Sayaka
雑誌名	東洋学研究
巻	57
ページ	167(330) -188(309)
発行年	2020-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00012043/">http://id.nii.ac.jp/1060/00012043/</a>

# インド密教における五護陀羅尼と女尊 — Mahāmāyūrī と Mārīcī を中心に —\*

園 田 沙弥佳

はじめに

## 1) 研究の背景と目的

密教における「陀羅尼」(dhāraṇī) とは、様々な現世利益的な功德を期待された、いわゆる呪文の機能を持つ。そのサンスクリット語が女性形であることから、インド後期密教の時代において神格化される際は、主に女尊として表現された。著者が現在研究対象としている「五護陀羅尼」(Pañcarakṣā) もまた、5 尊の女尊として神格化された。

五護陀羅尼とは特定の 5 種の初期密教経典の集成、あるいはそれらが神格化された女尊を示す。すなわち、『大随求陀羅尼』*Mahāpratisarā*、『守護大千国土經』*Mahāsāhasrapramardanī*、『孔雀經』*Mahāmāyūrī*、『大寒林陀羅尼』*Mahāśītavātī*、『大護明陀羅尼』*Mahāmantrānusāriṇī* の 5 種である<sup>1</sup>。

五護陀羅尼のうち、『孔雀經』は初期密教経典の中でも最初期に成立した経典とされる。日本には空海によって請来され、鎮護国家の大法の一つとして古くから重要な密教経典の一つに位置づけられた。本論文で取り上げる女尊 Mahāmāyūrī (以下、マハーマーユリーと称す) は、この『孔雀經』にもあらわれる孔雀の持つ特性が神格化された女神と言われている (図 1. 参照<sup>2</sup>)。なお、五護陀羅尼には現在 2 種の構成



図 1. 孔雀明王像 平安時代後期 (12C) 国宝

\*本研究は JSPS 科研費 JP19K12950 の助成を受けたものである。This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19K12950 (Grant-in-Aid for Young Scientists).

1 神格化された際、『大随求陀羅尼』は「大随求明妃 (マハープラティサラー)」等と呼ばれる。同様に、『守護大千国土經』は「大千摧碎明妃 (マハーサーハスラブラマルダニー)、『孔雀經』は孔雀明妃 (マハーマーユリー)、『大寒林陀羅尼』は大寒林明妃 (マハーシートヴァティ)、『大護明陀羅尼』は密呪随持明妃 (マハーマントラヌサーリニー) 等と呼ばれる。

2 横浜美術館 2019 p.25 No.6

の存在が明らかになっており、『大寒林陀羅尼』『大護明陀羅尼』はサンスクリット・テキスト系統とチベット語訳系統の間で内容が大きく異なる<sup>3</sup>。本論文では特に記述がない限り、サンスクリット・テキスト系統の五護陀羅尼を取り扱う。以上の各経典は3～7Cの初期密教時代<sup>4</sup>に各々単独で成立し、7、8Cに五護陀羅尼として一括され、インド、ネパール、チベット等において信仰の対象となった<sup>5</sup>。

11～12C前半頃にインドの学匠アバヤーカラグプタ Abhayākara Gupta によって編纂されたインド後期密教文献の一つである成就法集 *Sādhnamālā* (『成就法の花環』、略号 SM<sup>6</sup>) や、マンダラの観想法である *Niṣpannayogāvalī* (『完成せるヨーガの環』、略号 NPY) には、女尊として神格化された五護陀羅尼各明妃の成就法が収録されている。五護陀羅尼の一尊であるマハーマーユリーは、単独の本尊、あるいは五護陀羅尼マンダラとしてあらわれる他、女尊 Mārīcī (摩利支天、以下マーリーチーと称す) とともに、東南アジアで最も信仰されていた女尊ターラーの脇侍として説かれる例もある。マーリーチーとは陽炎・日光等が神格化した女神で、インドにおいて古くから信仰され、その後仏教に取り入れられた尊格である。五護陀羅尼と同様に、マーリーチーは特定の陀羅尼経典と関係が深い女尊としても知られている。

本研究では、孔雀の特性をもつマハーマーユリーと、日光が神格化されたマーリーチー、そして、両女尊がターラーの脇侍としてあらわれる成就法の特徴を比較検討して、インド後期密教における五護陀羅尼信仰の展開を解明する手掛かりとしたい。

## 2) 先行研究および研究方法

五護陀羅尼、および、マーリーチーの主な先行研究は以下のとおりである。まず、近年の五護陀羅尼研究に関しては、[森：2017]の研究において仏教の女尊が仏教に取り入れられた背景や関連する経典、儀礼等について言及されており、マハーマーユリーを中心に五護陀羅尼について解説されている<sup>7</sup>。なお、筆者は園田 2016 等において、密教経典お

3 2種の『大寒林陀羅尼』と『大護明陀羅尼』の内容構成について[園田 2016][園田 2018]でそれぞれ発表した。なお、大寒林陀羅尼が神格化の際に与えた影響に関しては[園田 2017]で取り上げた。各掲載論文 PDF および[園田 2017]を英訳した内容(“The Mahāśītavatī-sādhana in the Sādhnamālā [in English]”)を以下に公開している。URL: <https://mejira.academia.edu/SayakaSONODA>

4 初期密教時代は年代的に3～7世紀中頃までと比較的間隔があるが、大塚氏はこれを3つの期間に分割している(大塚: 2013: 序論)。大塚氏の研究によると、第1期(3～5世紀中頃)の陀羅尼は大乗の空思想や陀羅尼思想から展開した「密教系グラニ経典」と、小乗部派のバリッパ(護呪)から展開した「密教系護呪経典」に分類できるという。後者には五護陀羅尼のうち、『大寒林陀羅尼』の成立に関係した経典と、『孔雀経』が含まれる。また、第3期(6世紀後半～7世紀前半)には『大随求陀羅尼』の類本が新出しているという。

5 [立川: 2009: 135]

中国では五護陀羅尼として一括されず、別個の経典として漢訳されている。なお、五護陀羅尼がマンダラとして描かれる際、金剛界五仏と関連する例もある。SMには2種類の五護陀羅尼マンダラが説かれている。詳しくは[園田 2019]を参照。

6 [Bhattacharya 1968a]

7 [森 2017: 64-65]

よび神格化された五護陀羅尼信仰の展開について発表した。

次に、マーリーチーの研究として足利惇氏氏によって摩利支天陀羅尼（京都大学所蔵梵文写本 *Ārya-mārīcī-nāma-dhāraṇī*）<sup>8</sup>、および、SM No.142 が校訂されている<sup>9</sup>。後に〔高橋：2005〕のアーナンダガルバ研究で No.142 が和訳され、同時に、SM には含まれていないチベット語訳のマーリーチー成就法 3 種が指摘された。それらのうち 1 種<sup>10</sup>の前半部分は SM No.138 に相当しており、同論文で和訳されている。なお、近年〔田村：2018〕の研究によって SM 未収録のマーリーチー成就法である 6 種のデルゲ版（北京版は 7 種）の存在が指摘された<sup>11</sup>。〔森：2001〕では、インドの太陽神との関連性や、実際の作例にみられる特色等が解説されている。Donaldson〔2001a〕〔2001b〕の研究ではインド・オリッサ州における実際の作例と観想法の図像的特色について比較考察され、〔田中：2015: 125-126〕では SM No.137 の図像的特色について言及されている。

〔Bhattacharya: 1958〕〔頼富・下泉：1994: 210-213〕では、密教諸尊の図像的特色が網羅的に述べられている。他方、SM と同時期に編纂された NPY No.17「マーリーチーマンガラの章」、No.18「五護陀羅尼マンガラの章」は〔立川 2009: 130-132〕で和訳されている<sup>12</sup>。

本論文では以上の先行研究を踏まえ、インド後期密教文献に属する SM を中心に、マハーマーユーリーとマーリーチーの成就法の特徴を比較考察する。具体的には、マハーマーユーリーが単独あるいは五護陀羅尼の一尊として説かれる成就法（SM No. 197, 201, 206, NPY No.18）と、マーリーチーの成就法（SM No. 132~147, NPY No.17）、そして、ターラーの脇侍としてマハーマーユーリーとマーリーチーのうち一尊あるいは両尊が説かれている成就法（SM No. 89, 91, 104, 116）を取り上げ、インド後期密教文献における各尊格の基本的な特色を明らかにする。

## 1. マハーマーユーリー

### 1) 『孔雀經』とマハーマーユーリー

マハーマーユーリーは、毒蛇の天敵である孔雀（Mayūra）の特性が神格化された女尊であるという（図 2. 参照<sup>13</sup>）。〔岩本：1984: 125〕によると、マハーマーユーリーは毒蛇の

8 〔足利 1960〕

9 SM No.142 Kalpoka-mārīcī-sādhanaṃ

足利氏によると、10C の天息災訳『佛說大摩里支菩薩經』第 1 卷の冒頭部分が京都大学所蔵梵文写本の内容と共通し、SM No.142 が同経典第 6~7 卷に介在していることが指摘された。少なくとも 8C 初頭の空訳に摩利支天成就法が説かれており、さらに 10C 末の天息災の漢訳中にはすでに SM No.142 の内容が含まれていることから、11C 後半~12C にかけて成立した SM に収録されるまでに、数百年にわたって伝わっていたことを物語っているという（足利 1961:3）。

10 Mārīcīdevīsādhanaṃ (D. No. 3661, P. No. 4484)

11 田村氏によると、表題にマーリーチーの名称はないものの、帰敬偈や奥書に明記されているという。その他、マーリーチーとルドラの関連性なども同論文で言及されている。

12 〔立川 2009: 130-132〕

13 〔森 2017: 図 2-6〕

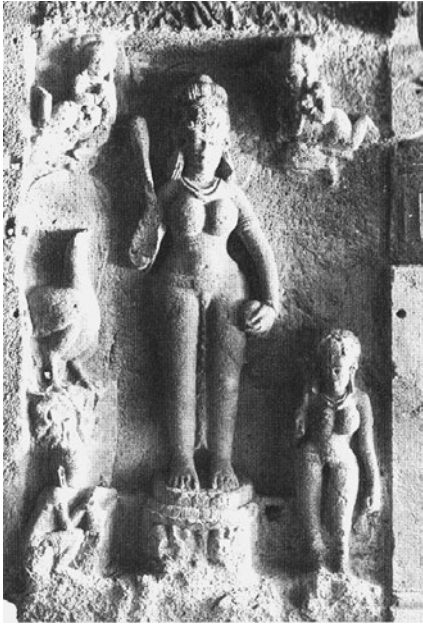


図 2. マハーマーユーリー像  
エローラ石窟寺院 インド・マハーラー  
シュトラ州

天敵である孔雀が、ヒンドゥー教のシャクティ（女性の力）信仰によって神格化され、グラマー＝デーヴァター（地母神）を経て、仏教に取り入れられたとされる。

マハーマーユーリーと関連付けられる経典である『孔雀経』は、サンスクリット・テキスト、チベット語訳テキスト、そして類本を含めた6種の漢訳経典が存在する<sup>14</sup>。ここでマハーマーユーリーの『孔雀経』の内容について簡単に述べると、まず、世尊がシュラーヴァスティの給孤独園に住していた時、スヴァーティーが黒蛇に右の親指をかまれ身体に毒が回ってしまったという。それを見たアーナンダは世尊に助けを求め、世尊は『孔雀経』の呪文や作法をアーナンダに教える。

次に、世尊の前世物語であるジャータカが語られる。世尊は昔、スヴァルナ・アヴァバーサ（黄金の輝き）という名の孔雀の王であった。雌の孔雀たちとともに過ごしていたが、ある日敵に捕らえられてしまう。その時、孔雀王の呪いを心に思い浮かべると敵から解放され、その孔雀王は無事に自国に帰ることが出来たという。

この陀羅尼によって、罰を受ける者は減刑され、火難、水死、毒等の難はなくなり、長命になる。さらにはこの呪を用いると竜族の者が喜び、長雨の際には雨を止ませ、干ばつの際には雨を降らせて人々を喜ばせる等の功德があるという。アーナンダは世尊より授けられたこの呪によって、スヴァーティーを蘇生させたという。以上が『孔雀経』の概要である。なお、この経典中に説かれる孔雀王と経典が神格化したマハーマーユーリーは別の存在であることが先行研究で指摘されている<sup>15</sup>。

次に、SM と NPY に説かれる観想上のマハーマーユーリーの基本的な特色について述べる。

## 2) マハーマーユーリー成就法の特徴

SM、NPY において、マハーマーユーリーは一面二臂、三面六臂、三面八臂の姿で表現されている。本論文では、マハーマーユーリーが本尊として説かれる成就法である SM

14 先に述べたように『孔雀経』は密教経典のなかでも初期に成立し、類本も複数存在するなど、その展開は複雑である。本経典に関しては〔大塚:2013: 第三章〕によって詳細に研究されている。

15 〔森:2017〕



No. 197, 201, 206, NPY No.18 と、ターラーの協侍として説かれる成就法 SM No. 89, 91, 104 を取り上げる。なお、No.197 と 201 は [園田 2019]、No.206 は [園田 2015] において発表したため、本論文では図像的特色を中心に述べる。

まず、マハーマーユリー単独の成就法である SM No. 197<sup>16</sup> では、マハーマーユリーは緑の MĀM 字より生じ、緑色の体色で三面六臂、各々の顔は三眼で、黒（青）と白い顔を有する。右手に孔雀の尾羽、矢を持ち、与願印を結ぶ。左手に宝石の山、弓、ひざに乗せた水瓶（utsaṅgaśtha-kalaśa）を持つ。半跏坐に坐し、不空成就如來の王冠を被る。

そして、SM No.201, 206, NPY No.18 のマハーマーユーリーは、五護陀羅尼マンダラを構成する一尊として説かれている。SM No.201 のマハーマーユーリーは前述の No. 197 同様、緑色の体色である。一面二臂で、右手に光り輝く孔雀の尾羽を持ち、左手に与願印を結ぶ。次に、SM No. 206 では、中尊であるマハーブラティサラーの南方に位置した、MAM 字の種字から変化した三面八臂の黄色いマハーマーユーリーを観想する。宝石の冠を被り、中央の顔は黄色、右面は青黒色、左面は赤色である。右手に与願印、宝石の水差し、輪、剣を持ち、左手に器の上の比丘 (pātropari bhikṣu)<sup>17</sup>、孔雀の尾羽、鈴の上の二重金剛 (ghaṇṭopari viśvavajra)<sup>18</sup>、宝石の旗 (ratna-dhvaja)<sup>19</sup> を持ち、結跏趺坐に坐す。そして、NPY No.18 のマハーマーユーリーは中尊マハーブラティサラーの北に位置し、体色は緑、三面八臂の女尊で、顔の色は緑、青黒、白色、右の手に孔雀の尾羽、矢を持ち、与願印を結び、剣を持ち、左の手に器の上の比丘 (pātropari bhikṣu)<sup>20</sup>、弓、宝石が零れ落ちる膝の上にある水差し (utsaṅgastha-ratnacchatā-varṣi-ghaṭa)<sup>21</sup>、二重金剛と宝石がついた旗 (viśvavajra-ratnāṅka-dhvaja) を持つ。

なお、No.206 は図像的特色以外にマハーマーユリーの性格も示している。No. 206 によると、マハーマーユリーは「二十七星宿や九曜<sup>22</sup>等によって称賛されるべき女神」であるという。そのほかにも、「アショーカ (aśoka) の樹<sup>23</sup>によって飾られ、その傍らにある七毒<sup>24</sup>によって覆い隠す女神」「恐ろしい黄褐色の髪をもつ者等や女羅刹の邪悪な心を粉々に砕く女神」「一切の蛇等を恐れさせる女神<sup>25</sup>」「天・竜・夜叉・乾闥婆たちによって礼拝されるべき女神」「かの一切の無生物・生物の毒を食らう女神」「かの神と悪魔とア

16 [Bhattacharya: 1968b: 234]

17 [森:2017:80]の一覧表には「鉢の上に比丘」とある。

18 [森:2017: 80]の一覧表には「鈴の上に羯磨杵」とある。

19 [森:2017:80] の一覧表には「宝の幃幡」とある。

20 [立川：2009：133] の和訳には「器の中の比丘」とある。

21 [立川：2009：133] の和訳には「膝の上に置かれて宝石をあふれさせた壺」とある。

22 [立川：2004：134-139]によると、ネパールにおける九曜は日曜、月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜、ラーフ（日月食の神、または月が満ちることの神格化）、ケートゥ（隕石の神、または月が欠けることの神格化）によって構成され、天体グループの中で重要視されているという。

23 学名: *Saraca indica*, Linn. 科名: Leguminosae マメ科 和名: ムウシュユ。小木で花卉はなく、萼（うてな）が花卉状で橙色、花糸は赤色であるという（和久博隆 2013『新装版仏教植物辞典』国書刊行会 p.1）。

24 sapta-visa 詳細については不明。

25 skt: samasta-nāgādinām santrāsanaḥ, Tib: གྲུ་ལ་སྟགས་པ་བཅས་ཅད་སྒྲུག་ པར་མཛད་པ།

シュラを魅了する女神」など説かれている。また、真言には「甘露のごとき女神」「胎を保護する女神」等とも記されている。

他方、脇侍としてのマハーマーユリーは SM No. 91 ヴァラダターラー成就法、No. 104 白ターラー成就法、そして No.116 マハーシュリーターラー成就法にあらわれる（付録 3. 参照）。尊容について言及のない No. 89 を除き、いずれも一面二臂の姿で表現されている。体色は No.104 の黒色を除き、黄色であることが共通している。持物はそれぞれ異動があるが、孔雀の尾羽を持っていることが共通している。

以上がマハーマーユリーの図像的特色である（付録 1. 参照）。体色は SM No.206 および No. 91, 116 で黄色、他の成就法は緑の体色であることが共通している。孔雀の尾羽を持つことと与願印を結ぶことはすべての成就法に共通しており、毒を取り除く孔雀の力が説かれる『孔雀経』が神格化したマハーマーユリーの特徴が反映されている。

## 2. マーリーチャー

### 1) マーリーチャーと陀羅尼

マーリーチャーは、サンスクリット語で陽炎、日光、月光、曙光等を意味する「マリーチ」(marīci) が神格化された女神である<sup>26</sup>。その起源をたどると、ヒンドゥー教の宗教詩『バガヴァッドギター』*Bhagavadgītā* では、風神マルトとして登場する<sup>27</sup>。マーリーチャーの尊容の形成には、インド神話における太陽神スーリヤや、その眷属である女神ウシャス<sup>28</sup>の姿が影響していると見られている。また、マーリーチャーは猪とともに現されることも多い。

マーリーチャー信仰はインドのパラ朝（8C～12C）以降の密教時代に広まったとされ、その作例はパラ朝期の仏教女尊のうちターラーに次いで2番目に多いという<sup>29</sup>。また、インドから出土したマーリーチャーの作品は、三面六臂<sup>30</sup>、三面八臂（次頁図 3. 参照）<sup>31</sup>、六面十二臂（オーディヤーナ・マーリーチャー）以外未確認であることが先行研究で指摘されている<sup>32</sup>。他方、観想上では上記の姿以外のマーリーチャーも説かれている。SM には 16 種

26 [森: 2001: 85] [高橋 2001: 78]

27 [塚本・松長・磯田: 1989: 93]

サンスクリット語の√mar（輝く、閃く）を語源とし、風神 marut の名もこれと同じ語源であるとする説がある（足利 1960, 142）。また、マルトは太陽光線 raśmi と見なされているという（田村: 2018: 36-37）。

28 『リグ・ヴェーダ』に登場する弓矢を持つ暁の女神。マーリーチャーは仏教の女尊の中でも最も早い時期から弓矢を持物とする（森: 2001: 89-90）。

29 [森: 2001: 86]

30 NPY No.17 に三面六臂のマーリーチャー・マンダラが説かれる。

31 東京国立博物館 2015『特別展 コルカタ・インド博物館所蔵インドの仏 仏教美術の源流』日本経済新聞社、No. 55

32 [森: 2001: 86]

[森: 2001: 89] によると、マーリーチャーの神格化はパラ朝以降に限定され、その姿は文献に記述された規程に忠実で地域差がないことから人工的に生み出されたイメージであるという。

のマーリーチー成就法が収録されており、一面二臂のほか、三面八臂、五面十臂、六面十二臂、そして三面十六臂のマーリーチーの尊容が説かれている<sup>33</sup>。

前述のように、インド神話の既存のイメージから形成されたマーリーチーは後に仏教のパンテオンに組み込まれるようになり<sup>34</sup>、陀羅尼としても知られるようになった。マーリーチーに関連する主な陀羅尼には、京都大学所蔵梵文写本 *Ārya-mārīcī-nāma-dhāraṇī* (『摩利支天陀羅尼』)、梁失訳『仏説摩利支天陀羅尼呪経』<sup>35</sup>、唐不空訳『佛説摩利支天菩薩陀羅尼經』<sup>36</sup>、天息災訳『佛説大摩里支菩薩經』<sup>37</sup> 等が相当する<sup>38</sup>。そのうち、京大写本『摩利支天陀羅尼』は天息災訳の冒頭と共通しており、同系統の經典と見なされている<sup>39</sup>。また、[吉田：2018：41 注3]によると、李玉珉氏によって敦煌藏經洞から発見された写經中に梁失訳『仏説摩利支天陀羅尼呪経』と一致した写經の内容から、本經典が菩提流志訳であることが推定されているという<sup>40</sup>。また、唐阿地瞿多訳『陀羅尼集經』第10卷<sup>41</sup>ではマーリーチーの儀軌が説かれている。

他方、8C 前半頃にインド仏教中觀派の僧侶シャーンティデーヴァ Śāntideva が著したといわれる *Śikṣāsamuccaya* 『学処集成』<sup>42</sup> には、盗賊から身を守るための呪文としてマーリー



図3. 三面八臂のマーリーチー像  
11世紀(パラール朝)インド・ビハール州

33 SM Nos. 132-147

34 マーリーチーの族主には大日如来が設定されることが多い。観自在が阿弥陀如来の化仏を頭頂に飾るように、マーリーチーは大日如来と密接に関係しているという(森：2001：87-88)。

35 (6C 後半頃, T21, No.1256)

36 (8C, T21, No. 1258) 不空訳に説かれるマーリーチーの性質は、常に日天の前に存在し、人には見えず、捕らえられず、他者から害を受けることがないといった隠形の力を持つ。この陀羅尼を念じ、1～2寸以下のマーリーチー像を作成して携帯し、マンダラを作壇してマーリーチーを描いて安置し供養する者は、マーリーチーの様々な加護を得ることができると説かれている。そのため、日本においては武将たちに人気があったという(吉田：2018)。

37 [10C, T21, No.1258]

38 [塚本・松長・磯田編：1989：93-95]

39 [足利：1960]

40 李玉珉 2014「唐宋摩利支菩薩信仰仰圖像考」『故宫學術季刊』第31卷第四期 2014年夏号(筆者未見)

41 (T18, No. 901, 653年)『陀羅尼集經』に収録されている初期密教經典の内容はかなり発展したものと見られており、6C 後半ごろから7世紀初頭の成立と推測されている(鎌田茂雄、河村孝照他編 1998『大藏經全解説大事典』雄山閣 pp.266-268)

42 Bendall, Cecil. 1897-1902. *Çikṣhāsamuccaya*, A Compendium of Buddhistic Teaching Compiled by Çāntideva



チーの陀羅尼が説かれている。ここに登場する呪文の一部は、後述するインド後期密教経の NPY No.17 のマーリーチー・マンダラを構成する女神として登場している。そして、近代のネパールで成立した7つの陀羅尼經典の集成 *Saptavāra* には、マーリーチー陀羅尼 *Māricīdhāraṇī* が収録されている<sup>43</sup>。

その後、11～12C に成立したマンダラの観想法テキストである NPY の No.17 には、周囲に 24 尊の女神が配置された三面六臂のマーリーチーがマンダラの中尊として説かれている。また、同テキスト No.21 「法界語自在マンダラ」には、マンダラを構成している 12 尊の女尊のグループである「十二陀羅尼」にマーリーチーが含まれる<sup>44</sup>。

以上のように、インド神話において神格化された女神マーリーチーは仏教において特定の陀羅尼と関連付けられるようになり、成就法にも説かれるようになった。以下ではマーリーチー成就法のうち、比較的具体的に説かれている SM No.134 について取り上げる。

## 2) SM No.134 「儀軌所説マーリーチー成就法」

SM に説かれるマーリーチー成就法のうち、No. 134 は実際の作例にも見られる三面八臂のマーリーチーの姿が説かれている。本成就法は持物や猪の乗り物等、実際の作例にも見られる基本的なマーリーチーの特色が確認できる<sup>45</sup>。和訳については付録4.を参考とし、ここでは内容構成について簡単に述べる。

chiefly from Earlier Mahāyāna-sūtras. Bibliotheca buddhica 1. St. Pétersbourg: Commissionnaires de l'Académie Impériale des Sciences. p. 142

43 *Saptavāra* に収録されている陀羅尼は *Vasundhārānāmāṣṭottaraśataka*、*Vajravīdāraṇādhāraṇī*、*Gaṇapatihr̥daya*、*Uṣṇīṣaviṇayaḍdhāraṇī*、*Parṇaśavarīdhāraṇī*、*Māricīdhāraṇī*、*Grahamātrkādhāraṇī* の7種である。なお、5つの陀羅尼經典の集成である五護陀羅尼とは異なり、その奥書に“これらが *Saptavāra* である”という記述は見られないが、*Dhāraṇī-saṃgraha* などに上記の順番で説かれているという（塚本・松長・磯田編：1989: 67）

44 森雅秀 1989「『完成せるヨーガの環』(*Nispannayogavali*) 第21章「法界語自在マンダラ」訳及びテキスト」『国立民族学博物館研究報告 別冊7』国立民族学博物館 pp.235-279

45 他の成就法に述べられるマーリーチーの特色については、「付録2. SM におけるマーリーチーの図像的特色一覧 (Nos.132-143, 145-147)」を参照。この表は Nos.132-143, 145-147 を基に筆者が作成した。なお、参考に NPY No.17 も併せて表に示した。

SM No.134 「儀軌所説マーリーチー成就法」次第<sup>46</sup>

SM No.134
[0] 帰敬偈
[1] 観想の準備
[1.1] 魔障退散の儀礼
[1.2] 本尊の招請
[1.3] マーリーチーの尊容
[1.4] ラーフの尊容と観想
[1.5] 四天女の尊容と観想
[1.6] 供養と四梵住、空性の修習
[2] 種子より生じたマーリーチーの観想
[2.1] 大日如来の観想
[2.2] マーリーチーの観想
[2.3] 四天女の真言と四方への布置
[2.4] 観想後の行為

表 1. SM No.134 「儀軌所説マーリーチー成就法」次第<sup>47</sup>

## [1] 観想の準備

[1.1] 魔障退散の儀礼 まず観想の準備として聖なる女尊マーリーチーに帰依する<sup>48</sup>。

「オーム、パット」と唱え、心臓と眉間と頭頂<sup>49</sup>において忿怒拳を布置してから、「オーム、マーリーチーに、魔障らを追い払え、フーム、パット」と唱え諸々の魔障を押しつぶす。

[1.2] 本尊の招請 その後、自身の心臓の上で OM 字が変化した日輪において、黄色い MĀM 字を観想してから、放出された多数の光線によって集め、世尊母（マーリーチー）<sup>50</sup>を引き寄せて眼前の虚空に留める<sup>51</sup>。

[1.3] マーリーチーの尊容 その姿は黄色（gaūrī）<sup>52</sup>で三面八臂、各面に三眼を持つ。三面のうち右面は赤く、左面は黒い猪（vāraha-mukhi）である。右の4臂に金剛杵（vajra）・鉤（aṅkuśa）・矢（śara）・針（sūci）を持ち、左の4臂にはアショカの木（aśoka-pallava）・弓（cāpa）・糸（sūtra）を持ち、タルジャニー印（tarjanī）<sup>53</sup>を結ぶ。大日如来の王冠を着け、塔廟の中に住し（caitya-garbha-sthitam）<sup>54</sup>、赤い上着を着て、7匹の猪が引く戦車

46 [Bhattacharya: 1968a] No.134 を底本とし、サンスクリット写本に東京大学所蔵写本（Matsunami: 1965: No. 451）、および、京都大学所蔵写本（Goshima and Noguchi 1983, No.119）、チベット語訳に D No.3524 を適宜参考にした。なお、見出しと各番号は筆者が作成したものである。

47 この表は SM No.134 を基に筆者が作成した。下線部は尊格の観想について述べられる場面を示す。

48 Tib. のみ記述がある。

49 Tib. 心臓の中央と首と眉間と頭頂

50 [1.2] において、眼前に引き寄せる「世尊母」の具体的な尊格名は説かれていないが、後述する [2.2] で「以前説かれた色や腕などの特徴を持つマーリーチーの姿を」（自身に観想する）と説かれている。また、次の [1.3] に述べる図像の特色が、他の成就法にあるマーリーチーの特色と一致する。以上のことから、ここで説かれる世尊母とは本成就法の観想対象であるマーリーチーであると想定される。

51 Skt. -ākāṣe samākṛṣya bhagavatīm agrataḥ sthāpayet, Tib. bcom ldan 'das ma gdan drangs te mdū na gyi nam mkha' la bzhugs su gsol te

52 gaūrī には「白色」「黄（味がかった色）」「赤みがかった色」等という意味があるが、チベット語訳で該当する語に gser 「金」とあることから、ここでは「黄」を採用した。

53 人差し指を伸ばし、威嚇する印相。後期密教ではタルジャニー（折克印）と呼ばれる（田中公明 1996 「印相敦煌出土の八大明王儀軌について」『密教文化』195号、密教研究会 p.130）。

54 マーリーチーが説かれる成就法に「caitya」の語がたびたび見られる。マーリーチーが住する場所を

に乗り (sapta-śūkarā-rathārūḍha) 展左の姿勢である。

[1.4] ラーフの尊容と観想 次に、YAM 字から生じた風輪において、HAM 字から生じた月と太陽を持つ、非常に獐猛なラーフ (Rāhu、羅睺星) を観想する。戦車の中央で、4 尊の女神に囲まれているという。

[1.5] 四天女の尊容と観想 続いて、マーリーチーの眷属である 4 尊の女神 (四天女) を観想する。まず、東の方角に赤いヴァルターリー、南に黄色いヴァルダリー、西に白いヴァラーリー、北に赤いヴァラーハムキーを観想する。

[1.6] 供養と四梵住、空性の修習 供養 (pūjā)・敬礼 (praṇāma)・称赞 (stuti)・懺悔 (pāpadeśanā)・福德随喜 (puṇyānumodanā)・回向 (pariṇāma)・懇請 (yācanā)・三法帰依 (triśaraṇagamana)・発菩提心 (bodhicittotpāda)・依仏道 (mārgāśraya) 等をなす。また、四梵住を観想してから、「オーム、私は空性智金剛を本性とする者である」と唱え、空性と三昧を得るべきであるという。

## [2] 種子より生じたマーリーチーの観想

[2.1] 大日如来の観想 次に、日輪において OM 字から生じた大日如来を観想する。獅子座に座し、体色は白色、覚勝印 (智拳印) を結び、寂靜相<sup>55</sup> である。

[2.2] 本尊の観想 その心臓の上の月輪で、25 文字 (pañcaviṃśatyakṣaram)<sup>56</sup> に囲まれた MAM 字の変化によって生じたアショoka 樹の上の月輪で、MĀM 字を観想する。この一切の変化によって、以前説かれた色や腕などの特徴を持つマーリーチーの姿

表すほか (SM No.132, 134, 135, 137, 138, 146)、髪や頭頂に飾られることもある (NPY No. 17)。そもそも、caitya「塔廟」と stūpa「仏塔」は別の構造物を示す。[渡辺:2018:66-67]によると、『法華経』『法師品』では、経典が読誦されたり書写される場所が「チャイティヤ」(caitya)であり、それは如来の遺骨を安置する「ストゥーパ」(stūpa)と同じように尊崇されるべきである、と説かれている。

他方、SM や NPY において、caitya は仏塔と訳されることがある。例えば、NPY No.17 マーリーチーの尊容について説かれる場面で、[立川:2009:130]では「きらびやかな宝石の冠を被り、髪には仏塔の飾りが付けられ」と訳されている。対応するサンスクリットは vicitraratnamukutī caityālaṅkṛtamūrdhajā である (Bhattacharya:1972:41 l.3)。

また、マーリーチー成就法の他に、SM No.10 の本尊であるヴァジュラダルマ (金剛法) も caitya の中に住するという (caityāntaḥsthamahākarmma kūṭāgaravihāriṇam/ (Bhattacharya:1968: p. 33 l.12))。[佐久間:2011:116-118]では「仏塔の中に住する」と訳されている。

その他、SM No.206 五護陀羅尼マンダラの成就法に説かれるマハーブラティサラーの図像的特色にも caitya が見られる (caityālaṅkṛtamūrdhā)。

なお、15 世紀に南チベットのツァン地方でゴル派 (サキヤ派に属する学派) の作例と推測されているボストン美術館所蔵「カーラチャクラ諸尊図」には、中央のカーラチャクラを中心にして NPY や『ヴァジュラーヴァリー』に説かれる 42 のマンダラの中尊が描かれている。森氏によると、「右下にいるマーリーチーとマンジュヴァジュラは他の尊格とは異なり、後輩の周囲が白く縁どられ、上端にはチャイトヤが小さく描かれている」という (森雅秀 2002 「ボストン美術館カーラチャクラと諸尊図」『金沢大学文学部論集. 行動科学・哲学篇』22 号、金沢大学文学部 p.93)。

以上のことから、本論文ではマーリーチーが住する場所として示される caitya を「塔廟」、頭頂に飾られる caitya を「仏塔」と示す。

55 Tib. omit

56 具体的な対象は明らかではないが、ヴァルターリー Varttālī の真言を指していると思われる。詳しくは和訳注を参照。

を<sup>57</sup>、自身に直ちに観想する。

[2.3] 四天女の真言と四方への布置 その後、ヴァルターリーの真言をはじめとする四天女の真言を唱えて各々の女神を四方に布置する。

[2.4] 観想後の行為 真言行者は「オーム、マーリーチーに、マーム、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー<sup>58</sup>」と、観想の直後に唱えて3回加持してから、尊格の合一によって留まるべきであるという (devatāyogena viharttavyam iti)。以上が No.134 の概要である。

### 3) マーリーチー成就法の特徴

SM No.134 では観想の準備段階において、本尊であるマーリーチーとその眷属の具体的な姿を観想する場面が説かれている。この成就法にも見られるように、マーリーチーの基本的な特徴の一つに、「猪」との関連性があげられる。複数の面を持つマーリーチーの一面（主に左）が猪の面であることや、「ヴァラーハムッキー（猪面の女神）」というマーリーチーの眷属、そして、乗り物を引く動物が猪であることから、マーリーチーは猪との関係が深い。

サンスクリット・テキストで「猪」を示す時、「ヴァ（ー）ラーハ」 vāraha、「スーカラ」 śukara という語が用いられる。[森：2001：96-97]によると、スーカラは古くから猪あるいは豚を表すが、ヴィシュヌの化身である野猪にはヴァラーハを用いるという。SM では No.139 を除き<sup>59</sup>、前者は主にマーリーチーの面や尊格の名前で用いられていることに対し、後者は乗り物を引く猪を示す時に示されている。なお、チベット語訳では「ヴァラーハ」「スーカラ」に該当する語は両者とも「phag（豚）」が用いられている。

次に持物に関して述べる。先行研究において、マーリーチーは「アショカ樹の芽」、「糸と針」、「弓矢」を持つ場合が多いといわれている一方、具体的な成就法の例については言及されていない。ここで SM Nos.132-143、145-147 および NPY No.17 に説かれるマーリーチーの成就法 16 例について見てみると、アショカ樹の芽は 16 例全て、弓矢は 11 例<sup>60</sup>、糸と針は 9 例<sup>61</sup>が確認できる。針と糸は尊格の持ち物としてマーリーチーのほかにほとんど例がなく、経典には針と糸を用いて悪人の口と目を縫い合わせる懲罰者としてのイメージがあるといわれている。また、弓矢を持つことは多臂像においては珍しいことではないが、マーリーチーは仏教女尊の中で早期からこれらを持っていたという<sup>62</sup>。先行研究

57 具体的な記述はないが、前述の「[1.2] 本尊の招請」にて世尊母（マーリーチー）の尊容が具体的に説かれているため、この内容を指すと思われる。

58 この場面は智薩埵と三昧耶薩埵の合一を前提としているものと思われる。詳しくは和訳注参照。

59 No.139 では、マーリーチーの一面に「スーカラ」の語が用いられている。

60 SM Nos. 134, 137, 142, 146, 132, 136, 138, 139, 140, 143, NPY No.17

61 SM Nos. 147, 134, 137, 142, 146, 132, 135, 145, NPY No.17

62 [森：2001：89-90]

でも指摘されているように、以上の持物は SM の観想上のマーリーチーにおいても、基本的な持物であることが確認できる。他方、8 例<sup>63</sup>で「鉤」を手にしている。鉤は相手を引き寄せるためのカギ状の法具であり、この鉤もマーリーチーの基本的な持物の一つといえるだろう。

そして、マーリーチーの体色について述べると、一面二臂・三面六臂・三面八臂は黄色<sup>64</sup>、五面十臂は白色<sup>65</sup>、六面十二臂・六面十六臂は赤色と明確に分かれている<sup>66</sup>。その中で、六面十二臂は「オーディヤーナ・マーリーチー」とよばれ、オリッサ地方で実際に作例が確認されるマーリーチーである<sup>67</sup>。SM No.138, 139, 140 ではその名称が成就法中に説かれている。このマーリーチーは前述した基本的な特色に加え、持物にカパーラ（頭蓋骨）、三叉戟などといったシヴァの特徴が見られる<sup>68</sup>。なお、No.143 も六面十二臂のマーリーチーであるものの、オーディヤーナ・マーリーチーの名は成就法中に示されていない。しかしながら、他のオーディヤーナ・マーリーチーと同様に体色が赤であることや、シヴァの特色を持つことから、No.143 もオーディヤーナ・マーリーチーに比定できるだろう。

次に、SM における脇侍としてのマーリーチーの特徴について述べよう（付録 3. 参照）。ターラーの脇侍であるマーリーチーは、No. 89 カディラヴァニーターラー成就法、No. 104 白ターラー成就法に説かれている。なお、No. 91 ヴァラダターラー成就法、No. 116 マハーシュリーターラー成就法では単に「アショーカーンター」としか記されていないが、その尊容が他の成就法の「アショーカーンター・マーリーチー」と同様であることから、マーリーチーを示していることが推察される。先に述べたマハーマーユリー同様に尊容について言及のない No. 89 を除いて、いずれも一面二臂の姿で表現されている。持物はその名が示す通り、アショーカーの芽を持つことが共通している。

以上のことから、マーリーチーの姿は 2 種に大別できる。第 1 に、アショーカーの芽をはじめ、弓矢、針と糸、鉤を持つ基本的な姿、第 2 にカパーラや三叉戟を有するシヴァの要素が取り入れられたマーリーチーの姿である。

### 3. まとめ

以上、インド後期密教における観想上のマハーマーユリーとマーリーチーの基本的な特色を明らかにした。前述のように両女神は本尊として観想の対象となる以外に、ターラーの脇侍として登場する。ターラーとは東南アジアの諸国で最も信仰を集めた仏教の女

63 SM Nos. 134, 137, 142, 146, 132, 135, 136, 145

64 SM Nos.141, 147, 134, 137, 146, NPY No.17. なお、No. 133 は体色について言及はないが、他の 1 面 2 臂の体色と同様、黄色である可能性が高いと思われる。

65 SM Nos. 132, No.135

66 SM No.138, 139, 140, 143 五面十臂の 1 例（SM No. 136）と六面十二臂（SM No.145）。

67 [Donaldson: 1995: 179-180] [森: 2001: 293 注 19]

68 [佐久間: 2011: 187 注 40]



尊であり、その作例は釈迦、観音に次いで3番目に多く、女尊の中では第1位である<sup>69</sup>。白と緑が最初に観音の脇侍であった時のターラーの基本的な体色とされる<sup>70</sup>。その後密教の発達過程において、五仏との関係から、白・緑・黄・赤・青の五種類に分けられた。そのなかで、SMには初期のターラーである白ターラー (Sita-tārā) の脇侍として、マハーマーユーリーとマーリーチーが設定されている (図4. 参照<sup>71</sup>)。両女神の共通点としては、それぞれ名前の特徴を表した一面二臂の姿であらわされている。アショーカー・カーンター・マーリーチーはアショーカーの樹、マハーマーユーリーは孔雀の尾羽を持つ、という具合である。初期のターラー信仰に両尊が登場することから、この3尊は仏教女尊の中でも早い段階で成立していたことがうかがえる。

ターラーの脇侍としてマーユーリーとマーリーチーが選ばれた背景については明確ではないが、両者とも天体・天候と関係する女神であることが特徴的である。マーリーチーは自身が日光等が神格化された尊格である他にも、月食・日食を司るラーフと関係が深く、SM No.134 等の成就法でマーリーチーの眷属である四尊の女神とともに説かれている。一方、マハーマーユーリーもその尊格化の基となった經典である『孔雀經』において、長雨、干ばつを解消する功德が説かれるほか、SM No. 206 では二十七星宿、九曜に称賛される女神であることが説かれている。以上のような性格を持つマハーマーユーリーとマーリーチーをターラーの脇侍にすることで、特に天候による災害によって生じる様々な問題を解決する機能が期待されていたと推察される。

今回の成果を基に、陀羅尼經典から神格化された五護陀羅尼と、既存のイメージから神格化されたマーリーチーの特色を比較考察し、經典と神格化の関連性について今後さらに検討したい。

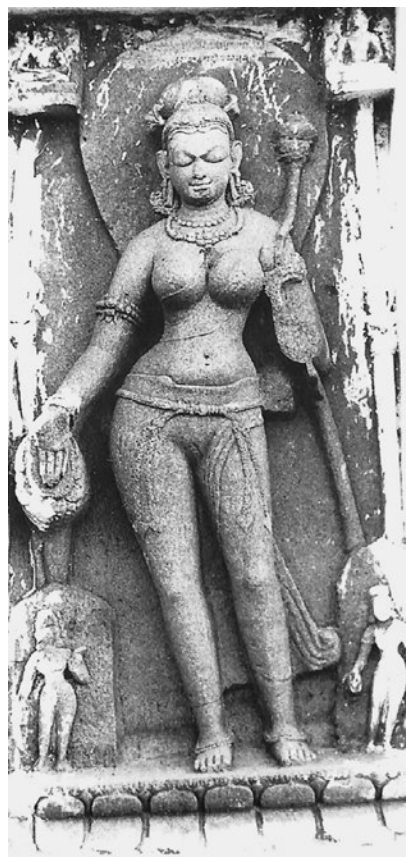


図4. 白ターラー像 9C末~10C初  
オディシャー州ソーランプル ラグナータ寺

69 [森: 2017: 4-5]

70 [頼富・下泉: 1994: 192-193]

71 [Donaldson 2001b, Fig. 288] 本図像の白ターラーの両脇にいる尊格は、アショーカー・カーンター・マーリーチーとマハーマーユーリーが推定されている。

	一面二臂	三面六臂	三面八臂	
SM No.	No.201	No. 197	No.206	NPY No.18
本尊	マハーマーユーリー	マハーマーユーリー (五護陀羅尼)	マハーマーユーリー (五護陀羅尼)	マハーマーユーリー (五護陀羅尼)
方角			南	北
種字		緑のMĀM	黄色	緑
体色	緑	緑		
面の数	1面	3面	3面	3面
眼		3眼	3眼	
中央の面の色			黄色	緑
その他の面の色		黒	青黒	青黒
		白	赤	白
臂	2臂	6臂	8臂	8臂
持物 (右)	孔雀の尾羽	孔雀の尾羽	与願印	孔雀の尾羽
		矢	宝石の水差し	矢
		与願印	輪	与願印
			剣	剣
持物 (左)	与願印	宝石の山	乞食の鉢	器の中の比丘
		弓	孔雀の尾羽	弓
		膝にある水瓶	水差しの上の二重金剛	宝石が零れ落ちる膝の上にある水差し
			宝石の旗	二重金剛と宝石の棒がある旗
王冠		不空成就の王冠	宝石の王冠	
足		半跏坐	結跏趺坐	結跏趺坐
その他			アショーカの芽に飾られる、七毒によって覆う、一切の蛇等を恐れさせる、無生物・生物の毒を食う、二十七星宿や九曜によって称赞される	

付録 1. SM・NPY におけるマハーマーユーリーの図像的特色一覧

(Nos.198, 201, 206, NPY No.18)

	一面二臂 (3例)			三面六臂	三面八臂 (4例)			
SM No.	No.133	No.141	No.147	NPY No.17	No.134	No.137	No.142	No.146
本尊	アショーカーカー ター・マーリー チー	アショーカーカー ター・マーリー チー	マーリーチー	マーリーチー	マーリーチー	黄マーリーチー	マーリーチー	マーリーチー
その他					四天女、ラーフ	四天女	四天女	
種字			MĀM	黄色いMĀM字	黄色いMĀM字	MĀM字		MĀM字
体色		黄色	黄色	黄色	黄色	黄色	黄色	黄色
面の数		1面		3面	3面	3面	3面	3面
眼					3眼	3眼	3眼	3眼
中央の面 の色				黄色			寂静「相」	愛情を伴った愛ら しい顔
その他の 面の色				白	赤	赤	赤	赤
				青(黒)、猪	青(黒)、猪	猪、怒りに満ちた 青	猪面、恐しい顔	猪、青黒
臂	2臂	2臂		6臂	8臂	8臂	8臂	8臂
持物 (右)	与願印	与願印	針	矢	金剛	針	金剛杵	金剛杵
			糸	金剛杵	鉤	鉤	針	矢
				針	矢	矢	鉤	鉤
					針	金剛杵	矢	針
持物 (左)	アショーカーのよ うな芽	アショーカーのよ うな芽		弓	アショーカー樹の蕾	タルジャニーと網 索	網索	タルジャニーと網 索
				糸	弓	弓	糸	弓
				花が付いたア ショーカー樹の蕾	糸	アショーカーの芽	アショーカー	アショーカーの芽
					タルジャニー	糸	弓	糸
王冠		大日如来の王冠		仏塔(caitya)に飾ら れた王冠	大日如来の王冠			
caitya (塔廟, 仏塔)					塔廟の中に住する	塔廟の中に住する		塔廟の中に住する
族主								
衣装				青い被り物を被る	赤い衣の被り物を 被る	きらびやかな赤い 被り物	赤い衣	赤い衣服、被り物
足				展左	展左	展左		
乗り物				金色の豚に乗る	7頭の豚の戦車	7匹の猪の戦車		7頭の豚(sū kara)の車

## 付録2. SM・NPYにおけるマーリーチーの図像的特色一覧

(Nos.132-143, 145-147, NPY No.17)

	五面十臂 (2例)		六面十二臂 (5例)					六面十六臂 (1例)
SM No.	No.132	No.135	No.136	No.138	No.139	No.140	No.143	No.145
本尊	マーリーチー	白マーリーチー	金剛界自在女マーリーチー	オーディヤーナ・マーリーチー	オーディヤーナ・マーリーチー	オーディヤーナ・マーリーチー	マーリーチー	マーリーチー
その他	3尊の女神	2尊の女神						
種字	白いMĀM字	白いMĀM字			赤いMAM			
体色	白		赤	赤色	赤	赤	赤	赤
面の数	5面	5面	6面	6面	6面	6面	6面	3面
眼			3眼		3眼	3眼	3眼	3眼
中央の面の色	白	身体の色 (白)	赤	赤	赤	赤	赤	白
その他の面の色	青 (黒)	黒	黒	青黒	青黒	白	青黒(kṛṣṇa)	猪面
	猪・赤	赤い猪面	緑	黒緑	白	黒	黒緑(syāma)	猪面
	緑	緑	黄	黄色	緑	黄黒	黄	
	黄色	黄色	白	白	黄色	黒	白	
			偉大な黒い猪の一面	黒い猪面	黒い豚面	猪面	猪面、青黒	
臂	10臂	10臂	12臂	12臂	12臂	12臂	12臂	
持物 (右)	日輪	(青い) 日輪	剣	剣	剣	剣	剣	アショーカーの花の良い花
	金剛杵	金剛杵	ほこ	金剛杵	輪	二重金剛	金剛	タルジャーニー
	矢	矢	鉤	槍	槍	独鈷杵	槍	金剛
	鉤	鉤	一本の針 (独鈷杵)	矢	矢	斧	矢	綱索
	針	針	金剛	独鈷杵	斧	矢	金剛	大きいカパーラ
			斧	斧	独鈷杵	槍	斧	糸
								頭
								吉祥な水瓶
持物 (左)	月輪	月輪	綱索とタルジャーニー	タルジャーニーと綱索	タルジャーニーと綱索	タルジャーニーと綱索	タルジャーニー	針
	弓	アショーカー樹の蕾	頭蓋骨	カパーラ	先端に觸體がついた杖	三叉戟	綱索	鉤
	アショーカー樹の蕾	綱索にタルジャーニー (期刻印)	アショーカーの芽	アショーカーの芽	カパーラ	アショーカーの芽	アショーカーの芽	長柄
	綱索、タルジャーニー	糸	梵天の首 (頭)	梵天の首	アショーカーの芽	弓	梵天の首	剣
	糸		弓	弓	梵天の首	綱索	弓	カルトリ (刀)
			三叉戟	三叉戟	弓	梵天の首	三叉戟	金剛杖 (棍棒)
					三叉戟		アショーカーと仏塔	斧
								ラビスラズリ
王冠					大日如来 (の王冠)	大日如来 (の王冠)		
caitya (塔廟, 仏塔)	塔廟の中に住する	塔廟の中		アショーカーの塔廟				
族主			大日如来	族主の黄色の大日如来				
衣装	白い上衣	白い上衣		カパーラの輪に飾られた	黄色い被り物			美しい虎皮の衣, 赤い被り物
足	四足(ヴィシュヌ, インドラ, シャンカラ(シヴァ), プラフマーを踏む)	四足	展左	展左				
乗り物	7頭の豚の戦車に乗る	7頭の猪の戦車		豚のひく車				

付録2 (続き). SM・NPYにおけるマーリーチーの図像的特色一覧

(SM Nos.132-143, 145-147, NPY No.17)

SM No.	No. 89	No.91		No.104		No.116	
本尊	カディラヴァ ニー	ヴァラダターラー		白ターラー		マハーシュリーターラー	
脇侍 【位置】	アショーカ カーンター・ マーリーチー 【右】	アショーカ カーンター (マーリーチー) 【右】	マハー マーユリー 【右】	マーリーチー 【右】	マハー マーユリー 【左】	アショーカ カーンター (マーリーチー) 【右】	マハー マーユリー 【右】
体色		黄色	黄色	黄色	黒色	黄色	
持物(右)		斧	杖	白い杖	杖	※アショーカ	※与願印
持物(左)		アショーカの芽	孔雀の尾羽	赤いアショーカ の芽	孔雀の尾羽	※金剛杵	※孔雀の尾羽
その他		宝石の王冠				宝石の王冠	

付録 3. SM におけるターラーの脇侍としてのマハーマーユリー、マーリーチの図像的特色一覧  
(Nos. 89, 91, 104, 116) ※は左右不明

#### 付録 4. SM No.134 「儀軌所説マーリーチー成就法」和訳

ここでは、SM に説かれているマーリーチーの成就法のうち、SM No. 134 の和訳を取り上げる。和訳に際して、[Bhattacharya: 1968a] No.134 (略号 B) を底本とし、サンスクリット写本に東京大学所蔵写本 (Matsunami, Seiren 1965, No. 451、略号 T)、および、京都大学所蔵写本 (Goshima and Noguchi 1983, No.119、略号 K)、チベット語訳にデルゲ版 No.3524 (略号 Tib.) を適宜参考にした。各和訳の見出しと冒頭に示される内容構成表は、いずれも筆者が作成したものである。

#### SM No.134 「儀軌所説マーリーチー成就法」

<p>[0] 帰敬偈</p> <p>[1] 観想の準備</p> <p>    [1.1] 魔障退散の儀礼</p> <p>    [1.2] 本尊の招請</p> <p>    [1.3] マーリーチーの尊容</p> <p>    [1.4] ラーフの尊容と観想</p> <p>    [1.5] 四天女の尊容と観想</p> <p>        [1.5.1] ヴァルターリーの観想</p> <p>        [1.5.2] ヴァダーリーの観想</p> <p>        [1.5.3] ヴァラーリーの観想</p> <p>        [1.5.4] ヴァラーハムキーの観想</p> <p>    [1.6] 供養と四梵住、空性の修習</p>	<p>[2] 種子より生じたマーリーチーの観想</p> <p>    [2.1] 大日如来の観想</p> <p>    [2.2] マーリーチーの観想</p> <p>    [2.3] 四天女の真言と四方への布置</p> <p>        [2.3.1] ヴァルターリーの真言</p> <p>        [2.3.2] ヴァダーリーの真言</p> <p>        [2.3.3] ヴァラーリーの真言</p> <p>        [2.3.4] ヴァラーハムッキーの真言</p> <p>    [2.4] 観想後の行為</p>
---	--

SM No.134 「儀軌所説マーリーチー成就法」内容構成



## [0] 帰敬偈

聖なる女尊マーリーチーに帰依します<sup>72</sup>。師たちは無限の幸福に無執着である完成した智慧を持つ者たちに、敬礼してからマーリーチーの儀軌の成就法を今記す。

## [1] 観想の準備

## [1.1] 魔障退散の儀礼

一切世界を救済する意向の行者は、「オーム、パット」と唱えることによって、心臓と眉間と頭頂<sup>73</sup>において忿怒拳をなし（布置し）てから、「オーム、マーリーチーに、魔障らを追い払え、フーム、パット」と言い、また、こ〔の真言〕によって魔障らを押しつぶす。

## [1.2] 本尊の招請

その後、自身の心臓〔の上〕で、オーム字が変化した日輪において黄色いマーム (MĀM) 字を瞑想してから、その放出された多数の光線によって〔その光が〕虚空に集まった後、世尊母（マーリーチー）が眼前に〔引き寄せられ<sup>74</sup>〕留まるべきである<sup>75</sup>。

## [1.3] マーリーチーの尊容

〔その姿は、体色が〕黄色 (gaṇī) <sup>76</sup> で、三面三眼八臂、右面は赤く、左は黒に変化した猪面 (vāraha-mukhī) <sup>77</sup> で〔ある。〕右の4臂は金剛杵・鉤 (aṅkuśa) <sup>78</sup>・矢 (śara) <sup>79</sup>・針 (sūcī) <sup>80</sup> を持ち、左の4臂にはアショカカの樹の芽 (aśoka-pallava)・弓 (cāpa)・糸 (sūtra)・タルジャニー印を〔結ぶ。〕大日如来の王冠〔を着け〕、様々な装飾品を持ち、塔廟の中に住し (caitya-garbha-sṭhitam) <sup>81</sup>、赤い被り物をかぶり、7匹の猪の戦車に乗り (sapta-śūkara-

72 Tib. のみ記述がある。

73 Tib. 心臓の中央と首と眉間と頭頂

74 Tib. gdan drangs, Skt. Omit. SM No.26 に同様の表現がある (佐久間: 2011: 337)

75 B -ākāṣe samākṛṣya bhagavatīm agrataḥ sthāpayet, Tib. bcom ldan 'das ma gdan drangs te mdu na gyi nam mkha' la bzhugs su gsol te

76 B, T, K gaurī には「白色」「黄 (味がかった色)」「赤みがかった色」等という意味がある。Tib. には該当する語に gser 「金」とあることから、ここでは金色に近い「黄」を採用した。

77 マーリーチー成就法ではマーリーチーの面 (主に左)、眷属の名前や顔、あるいは乗り物にたびたび「猪」を表す語「ヴァ (ー) ラーハ」vāraha、「スーカラ」śūkara が現れる。「スーカラ」は古くから猪あるいは豚を表すが、ヴィシヌの化身の野猪には「ヴァラーハ」を用いるという (森: 2001: 96-97)。ただし SM No.139 (バツチャリヤ校訂本) ではマーリーチーの一面に「スーカラ」が用いられている。チベット語訳では「ヴァラーハ」「スーカラ」に該当する語が両者とも phag と表されている。

78 SM に説かれるマーリーチー 15 例のうち、8 例において「鉤」を手にしていて。鉤は相手を引き寄せるためのカギ状の道具であり、懲罰者としてのマーリーチーの性格を象徴していると思われる。この鉤もマーリーチーの基本的な持物の一つといえるだろう。

79 持物の中で、弓矢を持つことは多臂像においては珍しいことではないが、マーリーチーは仏教女尊の中で早期からこれらを持っていたという (森 2001: 89-90)。

80 尊格の持ち物としてマーリーチーのほかにはほとんど例がなく、經典には針と糸を用いて悪人の口と目を縫い合わせる懲罰者としてのイメージがあるといわれている (森: 2001: 90)。

81 NPY にはこの2尊はチャイトヤの中に住しているという (森: 2002: 93)。また、SM No.10 に説かれ

rathārūḍha)、展左の姿勢で [ある]。

#### [1.4] ラーフの尊容と観想

ヤム (YAM) 字から生じた風輪において、ハム (HAM) 字から生じた月と太陽 を持つ非常に獷猛なラーフを、戦車の中央で4尊の女神に囲まれていることを [観想すべきである]。

#### [1.5] 四天女の尊容と観想

##### [1.5.1] ヴァルターリーの観想

その場合、東の方角においてヴァルターリーは、赤い [体色で]、猪面で、右手に4本の腕に、針と鉤を持ち、左手に絹索とアショーカーの樹を [持つ。] また、赤い上着を持つという。

##### [1.5.2] ヴァダーリーの観想

同様に、南においてヴァダーリーを [観想する。] 黄色い [体色で]、アショーカーの小枝と糸を左右の腕に [持ち]、金剛杵と絹索を右左に [持つ。] クマーリーの姿で、みずみずしく若く装飾品を持つ。

##### [1.5.3] ヴァラーリーの観想

同様に、西においてヴァラーリーを [観想する。] 白い [体色で]、金剛杵と針を右腕に [持ち]、絹索とアショーカーの樹を持った左腕で、展左の姿勢で、また、美しい姿であるという。

##### [1.5.4] ヴァラーハムキーの観想

同様に北の方角で、ヴァラーハムキーを [観想する。] 赤い体色で、三眼で、四臂で、金剛と矢を持った右腕をなし、弓とアショーカーの樹を持った左をなし、神々しい姿を観想する。

#### [1.6] 供養と四梵住、空性の修習

その後、供養 (pūjā)・敬礼 (praṇāma)・称赞 (stuti)・懺悔 (pāpadeśanā)・福德随喜 (puṇyānumodanā)・回向 (pariṇāma)・懇請 (yācanā)・三宝帰依 (triśaraṇagamana)・発菩提心 (bodhicittotpāda)・依仏道 (mārgāśraya) などをなし、また、四梵住がなされてから、「オーム、私は空性智金剛を本性とする者である」と [唱え]、空性と三昧を得るべきである。

---

るヴァジュラダルマ (金剛法) もチャイトヤの中に住している (佐久間: 2011: 116-118)。

## [2] 種子より生じたマーリーチーの観想

## [2.1] 大日如來の観想

そこで、日輪においてオーム（OM）字から生じた大日如來を「観想する」。獅子座に座し、「体色が」白色で、編んだ髪で冠を身に着け、覚勝印（智拳印）を結び、寂靜「相」で<sup>82</sup>、一切の飾りに飾られた「姿の大日如來を観想すべきである」。

## [2.2] マーリーチーの観想

その心臓「の上」の月輪で、25の文字に完全に囲まれた MAM 字<sup>83</sup>の種字の一切の変化によって生じたアショカ樹、その上の月輪でマーム（MAM）字を「観想する」。この一切の変化によって、「以前に」説かれた色や腕などの特徴のマーリーチーの姿を自身に「直ちに<sup>84</sup>」観想する。

## [2.3] 四天女の真言と四方への布置

## [2.3.1] ヴァルターリーの真言

その後、「オーム、マーリーチーに、ヴァルターリーよ、ヴァダーリーよ、ヴァラーリーよ、ヴァラーハムキーよ、引き寄せよ、ジャハ、スヴァーハー（om mārīcyai varttāli vadāli varāli varāhamukhi ākarśaya jah svāhā）」というこの「真言」によって、ヴァルターリーを東の方角に布置すべし。

## [2.3.2] ヴァダーリーの真言

同様に、「オーム、マーリーチーに、ヴァルターリーよ<sup>85</sup>、ヴァダーリーよ、ヴァラーリーよ、ヴァラーハムキーよ、一切の悪難調の者たちの口を縛せ、縛せ、フーム、スヴァーハー」というこの「真言」によって、南においてヴァダーリーを「布置すべし」。

## [2.3.3] ヴァラーリーの真言

同様に、「オーム、マーリーチーに、ヴァルターリーよ、ヴァダーリーよ、ヴァラーリーよ、ヴァラーハムキーよ、一切の悪難調<sup>86</sup>の者たちの口を硬直させよ、ヴァム、

82 Tib. omit

83 No.142に同様の表現があるが、具体的な対象は明らかではない。[足利：1961：52]では25文字（pañcaviṃśatikam aksaram）について、同成就法に説かれている "sva bhā va śu ddhāḥ sa rva dha rmāḥ sva bhā va śu ddho 'ham" の15文字を示している。一方で、[高橋：2005：82注8]にはヴァッターリー（ヴァルターリー）の真言である "om mā rī cyai va rttā li va dā li va ra li vā rā hā mu khi si ddhī mā ka rśa ya jah svā hā" のうち、「jah」までの25文字であることが推察されている。

なお、本論文で取り上げている No. 134[2.3.1]では、ヴァッターリーの真言として "om mā rī cyai va rttā li va dā li va rā li va rā hā mu khi ā ka rśa ya jah svā hā" と説かれている。この真言は上記で高橋氏が指摘したヴァッターリーの真言とほぼ同一である。No.142と比較すると一語（siddhi）を欠いているものの、音の上では末尾の「svā hā」を含めて25文字となるため、本成就法における「25文字」もまた、ヴァルターリーの真言を指していると思われる。

84 Tib.

85 Bで varttāli とあるが、前後の真言では varttāli とあることから、後者を採用した。

86 SM No.142では sarva-duṣṭān m.pl.Ac.「難調の者たちを」とあるが（足利：1961）（高橋：2005）、本成就法では sarva-duṣṭapraduṣṭānām m.pl.G.「悪難調の者たちの」とある。

スヴァーハー」というこの「真言」によって、西においてヴァラーリーを「布置すべし」。

### [2.3.4] ヴァラーハムキーの真言

同様に、「オーム、マーリーチーに、ヴァルターリーよ、ヴァダーリーよ、ヴァラーリーよ、ヴァラーハムキーよ、一切の有情たちを<sup>87</sup>自在に導け、ホーホ、スヴァーハー」というこの「真言」によって、北においてもまた、ヴァラーハムツキーを「布置すべし」と言う。

## [2.4] 観想後の行為

マントラを唱える者は「オーム、マーリーチャーに、マーム、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー<sup>88</sup>」と、観想の直後に「言う」。このように3回<sup>89</sup>加持してから、尊格の合一によって留まるべきであるという (devatāyogena vihartavyam iti)<sup>90</sup>。[以上で] 儀軌所説マーリーチャー成就法を終える。

## — 参考文献 —

- 足利惇氏 1960『摩利支天陀羅尼の梵本』『中野教授古稀記念論文集』中野教授古稀記念論文集  
編纂委員会、135-143.
- 1961「Kalpokta-māricī-sādhana とその漢訳」『仏教史学論集：塚本博士頌寿記念』塚  
本博士頌寿記念会、48-61.
- 岩本裕 1984「大乘仏典の形成をめぐる一特に異教からの影響をテーマとして」『東洋学術研  
究通巻 106 号（23 巻 1 号）』、東洋学術研究所、124-140
- 佐久間留理子 2011『インド密教の観自在研究』山喜房仏書林.
- 清水乞 1978「インドの密教儀礼と造形—サーダナマラーを中心として」『日本仏教学会年  
報 43』大谷大学内日本仏教学会西部事務所.
- 園田沙弥佳 2014「『サーダナ・マラー』における五護陀羅尼の成就法」『印度学仏教学研究』第  
63 巻 1 号、日本印度学仏教学会、435-438.
- 2015「『サーダナ・マラー』 No.206「五護陀羅尼成就法」について」『東洋大学大学  
院紀要』第 51 号、東洋大学大学院、124-147.
- 2016『大寒林陀羅尼』Mahāśītavatī 異本について『印度學佛教學研究』第 65 巻 1 号、  
日本印度学仏教学会、375-371
- 2017「『成就法の花環』Sādhana-mālā における大寒林明妃成就法」『印度學佛教學研究』  
第 66 巻 1 号、日本印度学仏教学会、371-368
- 2018「『大護明陀羅尼』Mahamantranusarini 別本について」『印度學佛教學研究』第 67

87 sarvvasattvān m.pl.Ac. No.142 では sarvvasattvānām m.pl.G.「一切の有情たちを」

88 チベット語訳 *Māricīdevīsādhanaṃ* (D. No. 3661, P. No. 4484)、および、その前半部分と対応する SM No.138 に同様の真言が説かれており、いずれも本尊マリーチーの観想後、智薩埵 (*jñānasattva*) と三昧耶薩埵 (*samayasattva*) が合一する場面において唱えられる。No.134 では合一の場面について明確に示されていないが、前述の真言が説かれることから、この場面は智薩埵と三昧耶薩埵の合一を前提としているものと思われる。なお、アーナンダガルバ作 *Māricīdevīsādhanaṃ* (D. No. 3661, P. No. 4484) はバツチャリヤ校訂版 SM には含まれておらず、チベット大蔵經にのみ現在確認されているという (高橋: 2005: 66-67)。

89 Skt. *samdhyā* 一日の中の3つの複合点、日の出・正午・日没を指すという（佐久間：2011：458 注73）

90 Tib. གནས་པར་བྱའོ 「留まるべきである」

- 卷1号、日本印度学仏教学会、351-346
- 2019『『サーダナ・マラー』における2種の五護陀羅尼マンドラ』東洋学研究第56号、東洋大学東洋学研究所、197-212
- 高橋尚夫 2005「アーナンダガルバ作・摩利支天成就法」頼富本宏博士還暦記念論文集刊行会編『マンドラの諸相と文化：頼富本宏博士還暦記念論文集1号』法蔵館、65-83 (L).
- 立川武蔵 2009『完成せるヨーガの環』研究(三)『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』24号、愛知学院大学人間文化研究所編、117-143.
- 田中 公明 2015『仏教図像学』春秋社.
- 田村 宗英 2018「Mārīcī (摩利支天) についての一考察」『智山学報』67号、智山勸学会、35-43.
- 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編 1989『梵語仏典の研究IV 密教經典編』平楽寺書店.
- 森雅秀 2001『インド密教の仏たち』春秋社.
- 森雅秀 2017『仏教の女神たち』春秋社. 横浜美術館企画・監修 2019『原三溪の美術 伝説の大コレクション』求龍堂
- 吉田典代 2018「摩利支天をめぐる言説と美術：日天との関わり」『学習院大学文学部研究年報』65号、学習院大学文学部、25-47.
- 頼富本宏、下泉全暁 1994『密教仏像図典』人文書院.
- 渡辺章悟 2018「大乘仏典の伝承者— dharmabhāṇaka (説法師) の位置づけ」『国際哲学研究』7号、東洋大学国際哲学研究センター、pp.63-79
- Bhattacharya, Benoytosh (ed.). 1968a. The Sādhanaṁālā vol.II. Gaekwad's oriental series, vols. 26, 41, Baroda.
- Bhattacharya, Benoytosh. 1968b. The Indian Buddhist Iconography. Calcutta.
- Bhattacharya, Benoytosh. 1972. Niṣpannayogāvalī, Baroda.
- Goshima, Kiyotaka and Noguchi, Keiya. 1983. A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the possession of the Faculty of Letters. Kyoto University. compiled by K. Goshima and K. Noguchi. Kyoto.
- Matsunami, Seiren (comp.). 1965. A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library (『東京大学附属図書館所蔵梵文写本解説目録』). Tokyo.
- Thomas E. Donaldson. 2001a. Iconbography of the Buddhist Sculpture of Orissa vol.1 (Text). Abhinav Publications
- 2001b. Iconbography of the Buddhist Sculpture of Orissa vol.2 (Plate). Abhinav Publications

キーワード：Pañcarakṣā、Mahāmāyūrī、Mārīcī、初期密教經典、女神信仰